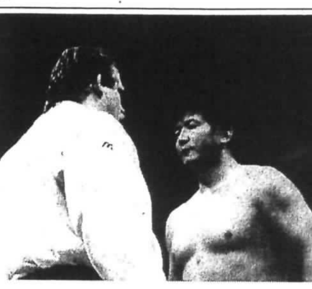
大阪・人



リングス　前田日明(34)

十三日夜、大阪府立体育会館で総合格闘技「リングス」の試合が行われる。しかし、故郷のリングの上に〝団体の顔〟前田日明（34）の姿はない。独りぼっちの旗揚げから二年半。左膝を手術、今秋の復帰戦を控えた『格闘家』の胸中は？（笹井　弘順）

ひとりぼっちの旗揚げから２年半…

必ずタイソンと戦う！

左ひざ故障で戦列離脱も　今秋には復帰

三十四歳で独身。「母親がうるさいよね。早く結婚しろ、見合いしろって。変な趣味あるんちゃうかって言うヤツもおるし」と、前田は苦笑いする。

三十一歳で独身の僕の場合も、時折思い出したように母親が似たことを口にする。僕が結婚しない理由はさて置き、前田が結婚していないのは「いろいろゴタゴタして、落ち着かなかったから」だ。

この二年半、前田の周辺はホントにゴタゴタした。

新日本プロレスに在籍した時代から「仲間」と信じてきた高田延彦らと袂を分けたのが一昨年の一月。

社会的ブームとなった第二次ＵＷＦ〝崩壊の理由〟は当人同士にしか分からない。いや、少なくとも当事者であるにもかかわらず、前田にすら何が起きたのか、当初は理解できなかったという。当時の心境を彼は「一月四日」「九日」と、二年前の性格な日時を、メモを見ることなく上げながら詳しく語った。

簡単に言えば、選手間のリーダー役を自負する前田は「一人でも俺のことを信用できへんというヤツがおったら、ＵＷＦは終わりやと思っていた」。そして彼の知らないうちに、第三者の欲が選手間を侵食していた。だから前田日明は一人になった。

「もう（選手生活も）終わりやと思ったね。ＵＷＦの仲間を失うということは、友達を失うということやったから」

立ち直るまでに約二カ月。そのために彼は敢えて「高田らとの関係はウソだった」と公言した。「自分で、そう思い込まないと前に行けなかったから」。しかしプロレス界のカリスマだった男の「ウソ」という発言は、ファンを悲しませもした。

そして同年五月に「リングス」旗揚げ。一人になった前田に、オランダの格闘家、クリス・ドルマンが協力を申し出、ＷＯＷＯＷでの放送も決まった。

ところが今度は七月の大阪での試合前に左膝のじん帯を痛める。たった一人の「リングス」の看板。休むわけにいかなかった。「毎試合、これが最後かも」と思いながら戦い続けた。が、限界。今年三月、手術を決意した。それが可能になったのは、ドルマンらオランダ勢や長井満也ら若手選手、そして空手の正道会館などが、前田の考えに共鳴し、ひとつの「輪」をなしていたからだろう。

〝選手のための会社〟めざす

目指すのは、大相撲（日本相撲協会）とボクシング（ＷＢＡ、ＷＢＣ）を合わせたような組織作り。

「選手のための会社っていうのかな。引退しても、そこでやっていけるようなな。ゆくゆくは各国でランキングを作って、その一位が集まってチャンピオンを決める―みたいにしたい」

すでに自分で足を運んで「リングス」のネットワークはオランダ、ロシア、グルジア、ブルガリア、スペインに広がった。一時、熱望した元世界ヘビー級統一王者、マイク・タイソン（米国）との対戦は、タイソンが「あと三年は刑務所に入ってる」（前田）ため実現は困難。しかし、そのために接触したプロモーター、ドン・キング氏との関係だけは、まだ断っていない。「最終的にはアメリカに進出したいから」だ。

その夢の結実のためには、やはり前田日明の存在が不可欠。復帰戦は十月二十三日、福岡国際スポーツセンターに決まった。

「不安？　リングス旗揚げの時には、ＵＷＦの最後から七カ月ほど試合してなかった。それに、あの時はホントに一人だったから。今は練習相手もいるし」

新しい仲間に囲まれた前田日明は、八月二十一日に横浜で行われる〝自分の〟デビュー十五周年記念大会を安心して欠場できる。

前田日明　昭和34年1月24日、大阪市大正区生まれ。新日本プロレスにスカウトされ、53年8月25日デビュー。ＵＷＦ、第2次ＵＷＦを経て、平成5月に「リングス」設立。192㌢、115㌔。

「ひいらぎ」主宰　小路紫峡さん(66)

〈バチカンに向ける十字架鳥渡る〉

初めての句碑がこのほど、香川県小豆島のオリーブ園に建立された＝写真右は妻、智恵子さん。

この句には多少の説明がいるかもしれない。小豆島は、隠れキリシタンゆかりの地。十六世紀には高さ十五㍍の大十字架が建てられていた。現在も毎年、オリーブ油がローマ法王に献上されている。

八九年に訪島した際に再建された十字架を訪れ、キリシタンの話を初めて聞いた。そこで詠んだのが冒頭の句だった。地元の強い要望で、大十字架のそばに句碑建立が実現した。が、すんなり建立が決まったわけでもなかった。

小豆島には、紫峡さんが四十年以上も師事した阿波野青畝さんの句碑がすでに二つ立っている。十字架を訪ねたのも青畝さんと一緒、件の俳句も共に詠んだ一句だった。

しかも、建立の話が持ち込まれたのが、昨年十二月に青畝さんが亡くなった直後。一度は「おこがましい」と建立を断った。

「それが、青畝先生が建てろと言ってくださる夢を見たんです。それで、改めて承諾しました」

十四歳の時、高浜虚子と一通の手紙をやり取りして俳句の道に入った。現在は俳誌「ひいらぎ」の主宰として活躍、本紙「おおさか俳壇」の選者でもある紫峡さんは、商事会社の専務という多忙な日々の合間に俳句をひねる。

「そんなに信仰厚い方ではないですが、一応キリスト教の信者なので、聖地と言われる場所に句碑が立ったというのは光栄です。縁というものも、強く感じるようになりましたね」

十字架の下、オリーブの緑に包まれて立つ句碑の石には、本人の強い希望で青畝さんのものより一回り小さいものが選ばれた。（篠）

隠れキリシタン句碑を建立

ブーメラン研究　大阪経大助教授　西山豊さん(44)

ブーメランはなぜ正確な飛行軌跡を描いて手元に戻るのか―。素朴な疑問を追い続けて、ゼミのテーマに取り上げ、遊具としての普及にも取り組んでいる。

学内サークルも発足

数理科学が専門。「生活の中の数理をふまじめに学ぶ」がモットーで、これまでにも「卵はなぜ卵型か」「鉛筆はなぜ六角形？」とユニークな研究がある。奇をてらったわけではなく、身近な疑問を数式に置き換え、敬遠されがちな数学を親しみやすいものに変える手法だ。

最新の研究が「ブーメランはなぜ戻る？」。この原理は現代科学もまだ解明し切れていない。十六年間追い続けてきた謎をゼミのテーマにした。

「調べれば調べるほど奥が深いですね」

ゼミでは、オーストラリア原住民の狩猟道具が起源と言われる歴史から始め、製作方法、投げ方を研究。飛行軌跡の数理解析へとテーマを発展させた。学生にも好評だ。

「Ｕターンは回るコマの原理を応用して数式化できる。でも戻る際、縦から水平に向きを変えるのがなぜか、まだ説明できない」

研究室には多種多様なブーメランが所狭しと置かれている。日本ブーメラン協会の会員でもあり、今年から専門に研究する学内サークルも発足させた。分析するだけでなく、ブーメラン本来の使い方、つまり「投げること」も忘れない。

六人の学生と共に来年八月に日本で開催の予定される世界大会への出場を目指して練習に励んでいる。

「黒板と本の学問は高校までで十分。実体験しながら幅広く学んでほしい。ブーメランはそのきっかけのひとつです」

偲ぶ

愛泉学園理事長・学園長
堺女子短期大学長
重山（しげやま）　重治（しげはる）さん

人前で決して取り乱さず入学式を済ませ緊急入院

どんなに苦しくても、弱音を吐いたことがない。仕事熱心で、決して手を抜かなかった。その厳しさゆえに「ワンマン」とも言われたが、とても繊細な気配りの人で、面倒見がよかった。

今春四月十日、学長を務める堺女子短期大学で平成五年度の入学式が行われた。その夜、大阪市東住吉区の自宅で、血を吐いて倒れ、救急車で病院へ運ばれた。あとから思うと、体調は最悪で、入学式に出席できる状態ではなかった。だが、つらいそぶりは全く見せず、演壇に登って訓示した。気力で立っていたとしか言いようがない。

三十年来の付き合いの大阪府私立中学校高等学校連合会会長・野田敏彦さん（浪商学園理事長）は、こう話す。

「その後、いったん退院されて、お宅に伺った時、重山先生は一枚のカードを取り出して私に示された。それは昨年八月に受けた血液検査票で、肝機能の悪化を示す数値が異常に高かった。重山先生はそれを誰にも知らせず、校務や上部団体の仕事に専念して来られた。いまさら愚痴になるが、なぜそこまで仕事を、と…」

また、同じ大阪府私立中高連副会長の釜谷行蔵さん（履正社理事長）はこういう。

「最後まで折り目正しく頑張り通すというか、取り乱すところを決して人に見せない。そんな男の生き方を感じます」

大正十二年（一九二三）三月、大阪生まれ。太平洋戦争末期の昭和十九年九月、関西大学法学部卒。戦後の二十一年暮れから愛泉高等女学校（堺女子高の前身）で教壇に立った。学校法人・愛泉学園は大正十一年に大阪府立堺高女の同窓会愛泉会によって創立された女子校。

教頭を経て、四十五歳で校長に就任。続いて四十六年に愛泉女子短期大学（堺女子短大の前身）の学長となり、さらに四十九年から愛泉学園理事長・学園長も兼務してきた。

その傍ら、大阪私学経営者協議会のリーダーとして活躍し、会長も務めた。また、大阪府私立中高連副会長のほか、大阪府私学振興教育研究所長、大阪府私立学校同和教育研究会長、大阪府私学生徒指導連盟会長など、数多くの役職を引き受けていた。

五月下旬に再入院。六月二十二日、肝不全のため永眠した。七十歳。

「亡くなられる一週間前にも病院へ伺って、仕事のことなどをお話ししたばかりなのに…。これから厳しい〝冬の時代〟を迎える私学にとって大きな宝物を失った」と野田さん。「家内からも〝あなたは、このごろ元気がない〟と言われます」と、ショックがまだ癒えない。

学園葬は二十二日午前十時～正午、堺市浅香山町の愛泉学園体育館で。葬儀委員長は野田敏彦さん。喪主は妻、説子（せつこ）さん。

（伊藤　勝惟）

毎週月曜日発行に掲載

議員ロビー

衆院選で大忙しです

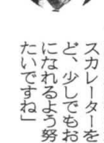
注目の衆院選もいよいよ後半戦に突入した。各府議も選挙戦の応援のため、忙しい毎日を送っている。府庁をのぞいても、「不在」を示す赤いランプがずらっと点灯していた。そんな中、「今日は用事があって、府庁に寄りました」という公明党、芦田武夫府議（八尾市選出）に話を聞くことができた。

「大変な選挙になると思いましたが、これほどとは…。こんなに票の読めない選挙は滅多にありませんよ」と困惑した表情を見せる。政党乱立で混迷が深まる中、危機感をより強くしているようだ。

八尾市を含む大阪四区は自民党候補が二人に増え、〝台風の目〟日本新党からも公認候補が出馬して、一気に激戦区になった。芦田府議も連日、後援会へのあいさつ回りなどを精力的にこなしているという。

「地方議員は場所を設定する裏方の仕事が多い。結局は候補者が話をして、有権者に訴えていかないといけませんから。とにかく頑張るだけです」

身にしみる老人問題



「同世代の友人に会うと『ウチのおふくろがね…』と、両親の健康についての話題が多くなりました。ちょうど、そういう年なんでしょうねぇ」

こうしみじみと語るのは自民党の天野一・大阪市議（住吉区選出）。市議は現在、四十五歳。七十七歳になる母親が健在だが、地元のミニ集会などでも老人問題の深刻さを考えさせられるという。

「公園でゲートボールをしているお年寄りをよく見かけますが、ああいう風に健康でいられるのは素晴らしいこと。実際は、外出することすらできない人がたくさんいます」

たとえば「地下鉄に乗るにしても階段が急だから怖くて乗れない」といった話をよく聞く。

「健康な人には何でもないちょっとしたことが、お年寄りにとっては深刻な問題になることもある。急な階段が障害になるのならエスカレーターを設置するなど、少しでもお年寄りの力になれるよう努力していきたいですね」

大阪点描

寂しい日曜日の中之島

日曜日の夕方、地下鉄に乗った。四ツ橋線の「なんば」から「肥後橋」までである。車両はウィークデーとうって変わりガラガラ。一目で一車両に何人乗っているのか数えられるほど。

「肥後橋」で下車、フェスティバルホールまで地下道を歩いたのだが、なんと誰一人も歩いていない。つまり誰とも出会わないのである。正直、いささか不気味な感じがした。いつもの雰囲気と全く違う空気が流れていた。北区と西区と中央区の境目、いわば市内の中心地域である。この風景こそ、ビジネス街の休日といえるのだろうか。しかし、余りにも淋しすぎる、と思った。もっとも堂島地下センターも祝日は定休である。

仕方がないといえばそれまでなのかもしれないが、中之島である。科学館もあれば、ホテルや放送局もある。もっと、いくら休日とはいえ、もう少し華やかな気分が欲しいと思っている人達は、決して少なくないはずだ。

（池内　峻）

北新地で聞いたラジオ体操

午後十一時、桜橋の交差点から大阪駅前ビルにかけて歩いていると、突然、ラジオ体操の音楽がきこえてきた。国道2号線にそって行われている「片福連絡線」の工事現場からだった。

地下数十㍍では、新しい駅の建設が進んでいるのであろう。梅雨の晴れ間、その上の道路で、工事関係者がそろって体操しているのが見えた。休憩なのか始業なのか定かではないが、体操で終わりではないだろう。多分、工事は二十四時間体制であるらしい。

新地に近いこともあって、この時間帯には人の行き来も多い。終電を目指して帰りを急ぐ人、これから飲むぞと意気込む人などが交錯している。そんな環境での、光景である。

談合だの、献金だの、建設事業をめぐってはあまりいい話が出ていない。けれど、それらは事業を決める方の話。いわば、そのやり方が問題なのである。現場では、こうして日夜働く人々もいて、仕事が成りたっている。

そんなことを考えさせるラジオ体操だった。

（竹井　宏）